

日吉キャンパス公開講座

「日吉キャンパス公開講座」は、慶應義塾大学が「地域に開かれたキャンパス」としての役割を果たすために発足しました。多くの分野・領域に渡る慶應義塾の研究・教育成果を広く一般の皆様へ還元し、学びの機会を提供することを目標としています。

当講座の前身は、昭和55年に横浜市からの要請により「横浜市民大学講座」として設置され、24年間にわたり開講されました。平成16年度より「日吉キャンパス公開講座」へと改編され、毎年秋にさまざまな年齢層の受講者250～300人をキャンパスにお迎えしています。また年度により、本講座に加えて「特別講座」や「フォローアップ講義」などが用意されます。本年度は12月～2014年1月に「特別講座 出版文化史の東西」を開講の予定です。

教養研究センターでは「日吉キャンパス公開講座運営委員会」を組織し、これまでも時代の変化を読み解きながら、受講者の知的関心に応え、また新たな興味を呼び起こすべく多様なテーマを取り上げてきました。今後もより一層充実した講座を開講してまいります。ぜひご参加ください。

2013年度テーマ 「人の形——身体の変遷と認識、身体は今とこれから」

「人はなぜ人の形をしているのか？」という疑問から出発し、身体というものを文系・理系・医学系を問わず、さまざまな学問ジャンルを横断して考察していきます。

期日・時間

2013年10月5日（土）～12月7日（土）までの毎週土曜日

13時00分から16時15分まで（全9回）

※11月23日は休講

実施場所

慶應義塾大学日吉キャンパス 第4校舎2階 J24 番教室

対象

社会人ほか

講義日程

講義日	講師	テーマ
		開講式
10/5	3 時限目	新島 進 オープニング（本講座の見とり図） —人形とアニメーションの身体—
	4 時限目	友松正人 中村孝男 現代人形劇表現における「人間」の身体
10/12	3 時限目	鈴木晃仁 医者と患者が描いた「人の形」の歴史
	4 時限目	山田 深 宇宙という極限環境における身体の変化 —有人宇宙開発と宇宙医学の視点から—
10/19	3 時限目	石黒 浩 人を知るためのロボット研究
	4 時限目	小倉孝誠 文学と身体の表象
10/26	3 時限目	石井 明 オペラ：限界への挑戦
	4 時限目	遠藤 謙 身体障害と社会と技術
11/2	3 時限目	松本 緑 身体づくり
	4 時限目	岡野栄之 iPS 細胞と再生医療研究の最前線
11/9	3 時限目	金山弘昌 ルネサンス美術の巨匠たちと「身体」 —レオナルドとミケランジェロの場合—
	4 時限目	今井倫太 人とインタラクションするロボット
11/16	3 時限目	設楽（小山）聡子 バレエにおける身体表象 —舞踊言語の謎を読む—
	4 時限目	井奥洪二 科学技術はどこまで人型に迫れるか
11/30	3 時限目	坂井利彰 トップアスリートの身体—クルム伊達公子選手を始め プロテニスアスリートがどのように身体を鍛えてツアー 転戦をしているのか—
	4 時限目	松崎英吾 ブラインドサッカーから考える身体知
12/7	3 時限目	藤田博史 人形愛の精神分析
	4 時限目	豊竹英大夫 伴野久美子 文楽の過去 現在 未来
		閉講式

※ ご案内時と時間割の一部が変更となりました。ご了承ください。

講師（講義順）

氏名	職名	専門
新島 進	経済学部准教授	近現代フランス文学
友松正人 中村孝男	人形劇団ひとみ座	人形劇俳優・演出家
鈴木晃仁	経済学部教授	医学史
山田 深	JAXA 客員研究員、 杏林大学医学部講師	リハビリテーション医学
石黒 浩	大阪大学大学院基礎工学研究科教授、ATR 石黒浩特別研究室室長	ロボット工学、視覚情報処理、 アンドロイドサイエンス
小倉孝誠	文学部教授	近代フランスの文学と文化史
石井 明	経済学部教授	音楽学（西洋音楽）
遠藤 謙	ソニー CSL	バイオメカニクス、ロボット
松本 緑	理工学部准教授	発生・生殖生物学 生き物達の生殖戦略
岡野栄之	大学院医学研究科委員長、 医学部教授	神経科学、幹細胞医学、再生医療
金山弘昌	文学部准教授	西洋美術史・西洋建築史 (特にイタリア)
今井倫太	理工学部准教授	人工知能、ヒューマンロボットインタラクション、ヒューマンエージェントインタラクション
設楽（小山）聡子	慶應義塾大学非常勤講師	仏文学（19世紀）、舞踊論、バレエ史
井奥洪二	経済学部教授	医工学、環境科学、材料科学、 科学技術社会論
坂井利彰	体育研究所専任講師	スポーツコーチング トップスポーツマネジメント
松崎英吾	日本ブラインドサッカー協会	組織経営、多様性研究
藤田博史	精神科医・精神分析家	精神病理学、形成外科学、美容外科学、 麻酔蘇生学、精神分析
豊竹英大夫 伴野久美子	文楽大夫 現代美術家	文楽 現代美術、日本の伝統芸能と現代音楽 (身体表現)

オープニング（本講座の見とり図） ～人形とアニメーションの身体

新島 進

本年度講座のオープニングとして、「人の形」というテーマの趣旨を詳らかにし、全講義内容の簡単な紹介をおこなう。

われわれは生まれてから死ぬまでつねに身体とともにあるにも関わらず、ふだんは身体を意識することはない——身体を意識するのは、病気のとことや身体の一部を欠損したとき、あるいはエロスが発動したときであろう。身体とはかように身近でありながら実に捉えがたく、また、部分部分は自分とは異なる他者のようでありながら、やはり自分自身であるという不思議なものである。この対象を各学問領域はどのように扱ってきたのだろうか。またテクノロジーや医療の進歩はわれわれの体を人工のものにしていき、そのつど身体認識、身体美の見直しを迫ってきた。つまり身体というものは理系、医学系、文系、芸術系といった諸領域が連動する言説の場でもある。そこでまずは、多岐にわたる今回の各講座の有機的なつながりを示し、身体というテーマの持つ分野横断的な性質を明らかにしたい。

そのうえで、私がそもそもこのテーマに関心を持つきっかけとなった、押井守監督の映画作品「イノセンス」（2004年）と、そのインスピレーション源であるハンス・ベルメール（1902年～1975年）の人形作品を外観する。これらアーティストたちがどのような身体論をもって作品を製作したのかを考えることで、本講座全体の問題提起を試みたい。なぜ人は人の形をしているのか、そして身体はこれからどうなっていくのか、と。

.....

新島 進（にいじま すすむ）

慶應義塾大学准教授。慶應義塾大学文学研究科修士課程（フランス文学）修了、レンヌ第二大学博士課程修了（文学博士）。専門はレーモン・ルーセル、独身者機械芸術。編著書に『ジュール・ヴェルヌが描いた横浜——「八十日間世界一周」の世界』（慶應義塾大学出版会）。訳書にレーモン・ルーセル『額の星 無数の太陽』（共訳、人文書院）、ダイ・シージエ『バルザックと小さな中国のお針子』（早川書房）、ジャック・ボドゥ『SF文学』（白水社）、レーモン・クノー『青い花』（水声社）ほか。近刊の翻訳書にミシェル・カルージュ『独身者機械』（東洋書林）がある。

現代人形劇表現における「人間」の身体

友松 正人、中村 孝男

人形劇団ひとみ座は、現代人形劇の作り手として、様々な表現に取り組んでいます。作品ごとに、伝えたい内容に即して、「人形」のデザイン、機構、操演（操作して演じる）のあり方を探っていきます。それは、「人間の身体」の形象、構造、動作を、意識し観察し発見し、表現を模索することになります。作品を通して伝えたいことは、人間の感情であり営みであり、人間の本質に他なりません。つまり、人形によって「人間の身体を表現すること」で、「人間の本質を表現する」ことを志していることになります。実際に人形の操演をお目かけながら、身体を表現することの奥行きを感じていただければと思います。

友松 正人（ともまつ まさと）

劇団歴 25 年。北海道大学在学中、人形劇に魅せられそのままひとみ座へ就職?!
主な作品は、1989 年版「大どろぼうホッツェンプロッツ」おまわりさん役、「マウイ・チキチキ」主人公の兄役、劇団創立 60 周年記念公演・シェイクスピア 3 部作「リア王」ケント伯役、「テンベスト」アントーニオ役、幼児劇場・ひよこ班、2013 年版「あまんじゃくとうりこひめ／牛方と山んば」あまんじゃく役／牛方役。演出・脚本に「あこがれの赤ずきんちゃん」「バイセクル」、シェイクスピア 3 部作「マクベス」（上演台本）。現在、劇団の事務局長の任にあり、かたわら講師活動に『パペットランド・とらまる人形劇研究所』（香川県）、『いいだ人形劇フェスタ』制作、日本台湾合作人形劇「動物整形外科病院」（長野県）他劇団人形操作指導、短期大学など。ほかに地元 J リーグ川崎フロンターレマスコット「フロンタくん」席ツメ隊、映像・CM 分野等、活動領域は多岐に渡る。

中村 孝男（なかむら たかお）

劇団歴 23 年。ふるさと福島県の郵便局勤務時、人形劇に魅せられ一大決心し転職、入団。
主な作品は、1996 年日本児童・青少年演劇劇団協同組合合同公演「稽古場〜ほくのはてしない物語」アトレユ役、1997 年劇団創立 50 周年公演「リア王」エドガー役、1998 年「マウイ・チキチキ」マウイ役、2001 年「少女と魚」魚の王・漁師役、2006 年劇団創立 60 周年公演・シェイクスピア 3 部作「リア王」エドガー役、2009 年同 3 部作「マクベス」演出協力とマクベス役、2012 年同 3 部作「テンベスト」演出協力とキャリバン役。脚本・演出は 1999 年「なかむらたかおのひとり人形劇〜リスおとこめ吉」、2005 年「はてな王子のはてながいっぱい大冒険」、2007 年「ちいさなぞうのパオパオ」受賞歴 2006 年度全国児童・青少年演劇協議会賞奨励賞。2012 年より劇団代表。幼児劇場に所属。講師活動としては、『パペットランド・とらまる人形劇研究所』（香川県）、保育士や小学校教諭向けの人形操作指導など。

医者と患者が描いた「人の形」の歴史

鈴木 晃仁

医者にとっても一般人にとっても人の形を描くことは重要な営みである。医学の領域においては、解剖学は人体の内部に分け入ってその構造を描き、生理学は古くは自然哲学、近代以降は物理学や化学の視点で人体の機能を解明する。それに照応するように、一般人にとっても人体の仕組みは重要な問題である。「人の形」を知ることは、病気にならないこと、健康を保つこと・取り戻すために大きな意味を持つだけでなく、「自己を知る」ことの一部であった。医者と一般人は学問と生活を交差させる形で、「人の形」を重ね合わせてきたのである。

ルネッサンス以降には解剖学の写実的な迫真性が上がり、19世紀以降には生理学の確信が高まっていくように、科学的真実性の発展があるのは言うまでもないが、それと相反するかのような、比喩的な表象の発達が併存していることにも注意しなければならない。医者たちは、常に、人体を何かにととえて描いてきたし、その構造を何かになぞらえて理解してきた。特に、20世紀においては、めざましい医科学の発展と並行して、ファシズムや共産主義の登場と敗北という大きな政治的な事件があり、生理学者たちは、これらの政治体に重ねて人体の仕組みを説明していた。医者たちは科学と比喩を共存させて「人の形」を描いてきたのである。一般人も、19世紀末から20世紀において、コレラや結核から HIV/AIDS に至るまで、細菌学と免疫学を媒介にして人体と外界の関係についての枠組みを作り上げてきた。

この講義は、このような主題のもとに、医者と一般人が呼応したり誤解したりしながら、人の形を描いてきたありさまを解説する。特に中心になるのは20世紀についての議論である。

鈴木 晃仁 (すずき あきひと)

1963年生。東京大学卒業(科学史科学哲学)、ロンドン大学ウェルカム医学史研究所 PhD。医療の社会史を研究し、主たる主題は、精神医療の歴史と、感染症の歴史、患者の受療行動の歴史など。業績に、Madness at Home: the Psychiatrist, the Patient and the Family in England 1820-1860 (2006) ; Reforming Public Health in Occupied Japan, 1945-52: Alien Prescriptions? (2011 Chris Aldous と共著) などがある。

宇宙という極限環境における身体の変化

— 有人宇宙開発と宇宙医学の視点から —

山田 深

地球の環境に適応するように進化してきた人類が、宇宙空間への進出を始めてから半世紀が過ぎました。現在では、世界 15 か国が参加して運用されている国際宇宙ステーションにおいて、宇宙飛行士の長期滞在ミッションが継続的に実施されています。

滞在の初期には、重力の影響がなくなり体液が上半身に移動するために、飛行士の顔はむくんだ状態になります。また、いわゆるバランス感覚が障害され、多くの飛行士が宇宙酔いを経験します。時間とともに身体が宇宙環境に適応していくと、このような症状は次第に軽減していきます。一方で、重力による負荷がかからないために生じる筋肉の萎縮や骨量の低下は、時間の経過とともに急激に進行していきます。国際宇宙ステーションに滞在中の宇宙飛行士は 1 日 2 時間程度の運動を実施していますが、それでも身体の衰えを完全に予防することはできません。地球に帰還してからは、重力環境に再び身体を適応させるためのリハビリテーションが必要となります。さらに、こうした身体の変化に加えて、放射線被曝、精神的ストレスへの対応、遠隔医療の問題など、宇宙飛行には様々なリスクが伴います。より遠くへ、より長期間、より安全な宇宙飛行を実現させるために、こうしたリスクを軽減するための医学研究や技術開発が進められています。

人の形

山田 深（やまだ しん）

宇宙航空研究開発機構客員研究員、杏林大学医学部リハビリテーション医学教室講師。慶應義塾大学医学部卒。博士（医学）。専門はリハビリテーション医学、とくに脳卒中後遺症と廃用症候群。慶應義塾大学講師を経て、2010 年 4 月から 2013 年 3 月まで宇宙航空研究開発機構宇宙医学生物学研究室主任研究員（宇宙飛行士健康管理グループ併任）。国際宇宙ステーションを中心として実施されている宇宙医学研究と、宇宙飛行士のリハビリテーションを担当した。

人を知るためのロボット研究

石黒 浩

機械化技術により自動車社会が創られ、情報化技術によりネット社会が創られ。次に我々が創るのはロボット化技術によるロボット化社会です。

ロボットは、コンピュータとセンサとアクチュエータからなる機械です。センサによって人の様子や環境の様子を認識し、アクチュエータ、すなわちモータなどによって、人や環境に働きかけます。今我々は多くのコンピュータを利用していますが、これらのコンピュータにセンサやアクチュエータが取り付けられることによって、コンピュータはさらに性能を増すとともに、より多くの場面で利用できるようになります。それがロボット化です。実はすでにロボット化は始まっています。携帯電話はコンピュータだけでなく、カメラやジャイロなどのセンサに加えて、バイブレータなどのアクチュエータも備えています。クーラー、洗濯機、電子レンジなど、ほとんどの家電製品は、コンピュータとセンサとアクチュエータが備えてあり、それらはもうロボットと呼んでも差し支えないでしょう。

そのようなロボット化社会において、どのようなロボットが必要でしょうか？ 私は人と関わり人にサービスを提供するためのロボットを実現するための研究に取り組んできました。本講演では、それらのロボットを紹介しながら、ロボットを研究すると何がわかるのかを一緒に考えたいと思います。

石黒 浩 (いしぐろ ひろし)

1963年滋賀県生まれ。大阪大学大学院基礎工学研究科システム創成専攻教授（特別教授）・ATR石黒浩特別研究室室長（ATRフェロー）。工学博士。社会で活動できる知的システムを持ったロボットの実現を目指し、これまでにヒューマノイドやアンドロイド、自身のコピーロボットであるジェミノイドなど多数のロボットを開発。2011年大阪文化賞（大阪府・大阪市）受賞、2013年大阪大学特別教授。

文学と身体の表象

小倉 孝誠

身体とは、自然と文化が出会う場であり、現代では哲学、社会学、ジェンダー研究にとって重要課題になっている。芸術の領域では、ダンスやバレエが端的に身体を表現手段にしているし、絵画、彫刻、映画でも身体が占める比重は大きい。それに較べると、言葉の芸術である文学においては身体表象のテーマが見えづらいかもかもしれない。しかし日本でも外国でも、近代文学はさまざまなかたちで身体を描き、語ってきた。現代日本文学において、たとえば赤坂真理や金原ひとみの小説において、身体とその違和感は大きな位置を占めている。本講義では、おもに近代フランス文学を素材にして、次の二つのテーマにそくして身体の表象を論じてみたい。

(1) 見つめられる女の身体：文学においては、男の身体よりも女の身体がはるかに頻繁に語られてきた。女の身体は欲望の対象であると同時に、怖れの対象でもあった。その両義性にとまどいながら、作家は女の身体とその情動を描く。見つめられる客体である女が見る主体に変貌するとき、何が起こるか。

(2) 病の表象：病は医学的な議論を超えたところで、さまざまな幻想や神話を生みだしてきたし、そうした幻想や神話もまた病という現象の一部をなす。病は社会的、倫理的に過剰な意味づけをされてしまうのだ。アルコール中毒、結核、ヒステリー、そしてエイズなど、近現代文学で問題となる病理の表象を問いかける。

.....

小倉 孝誠（おぐら こうせい）

1956年生まれ。1987年、パリ第4大学文学博士。1988年、東京大学大学院博士課程中退。現在、慶應義塾大学文学部教授。近代フランスを主なフィールドにして、文学、芸術、社会、思想を文化史の視点から総合的に読み解こうとしている。著書に『歴史と表象』（新曜社、1997年）、『いま、なぜゾラか』（共著、藤原書店、2002年）、『「感情教育」歴史・パリ・恋愛』（みすず書房、2005年）、『パリとセーヌ川』（中公新書、2008年）、『愛の情景』（中央公論新社、2011年）、『恋するフランス文学』（慶應義塾大学出版会、2012年）など。また訳書にフローベール『紋切型辞典』（岩波文庫、2000年）、ユルスナール『北の古文書』（白水社、2011年）などがある。

オペラ：限界への挑戦

石井 明

日吉キャンパスでは近年、日吉音楽学研究室が中心となって、地域コミュニティーの文化啓蒙活動に大きく貢献してきています。このような中、これまでとは一線を画す壮大なプロジェクトを行うことになりました。総合芸術であるオペラの上演です。取り上げるのは、モーツァルトの晩年の傑作、《コジ・ファン・トゥッテ》(1790年初演)です。《フィガロの結婚》および《ドン・ジョバンニ》を手掛けた、ロレンツォ・ダ・ポンテの台本による、いわゆるモーツァルト-ダ・ポンテ三部作の最後を飾るオペラです。誰もが楽しめる喜劇でありながら、それはモーツァルトの美しい旋律で溢れ、かつ情熱的で感動的な音楽で満たされています。オペラの公演日は、2013年12月21日(土)・22日(日)および2014年1月4日(土)・5日(日)の全4公演です。

これを記念して今回の講義では、オペラがいかに工夫されて作られていたかということ、《コジ・ファン・トゥッテ》を例として、音楽だけでなく、台本や当時の社会的状況をも含めた視点から検証していきます。作曲家、台本作家、歌手、演奏家、興行主、舞台製作などに関わったすべての人々に、時にそれぞれの人が持つ能力の限界までが求められていたという事実の一端でも理解していただきたいと考えています。

人の形

石井 明 (いしい あきら)

慶應義塾大学経済学部教授。音楽学博士。アメリカ、イーストマン音楽院(ロチェスター大学)器楽演奏科卒。インディアナ大学大学院古楽科を経て、1989年、デューク大学大学院へ編入学。1991年修士号取得。1999年博士号(PhD音楽学)取得。1999年より慶應義塾大学経済学部助教授、2010年より現職。日吉キャンパスにおいてさまざまな研究・教育活動に携わっている。その一環として、18世紀の演奏習慣の実習を目的に、慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・オーケストラ、そしてさらには、古楽器を用いた慶應義塾大学古楽アカデミーを主宰、指導を行っている。

身体障害と社会と技術

遠藤 謙

身体障害と健常者は法律で明確に分類され、社会保障の対象になっています。しかし、人間は誰もが年を取っていき、徐々に身体能力を失っていきます。それでは身体障害と健常者を区別するものは何でしょう？ 実は身体障害者と健常者の境は曖昧で、技術でその差を埋める事も可能なのです。例えば眼鏡は弱くなった視力を技術的に回復させるものです。眼鏡をかけた人を障害者と思う人はもはやいないでしょう。その理由は、眼鏡が優れた技術をもち、なおかつ身体にデザイン的にも機能的にもシームレスであるからです。このようなことが、筋肉や他の器官にもありえるのです。さらに、失われた機能を回復させるだけでなく、拡張することによって健常者を上回る事も可能であると私は思っています。近年では、パラリンピックの陸上競技の選手の義足は健足よりも軽く、代謝エネルギーも必要としないことから、健常者よりも走る事に関しては有利であると考えられる研究者もいます。このような見解は、科学技術の進歩により、健常者と身体障害者の身体能力の逆転もありえるという事を意味しています。

一方、世界中の身体障害者の半分以上は途上国に住み、このような技術に手の届かないところに住んでいます。そして、身体能力が劣っているために、社会活動にも参加できない人が多くいます。彼らの生活を変えるためには、彼らの生活環境、文化、経済、宗教、産業などの多くの制約を考慮した適切な技術を適切に配布する必要があるのです。

このように、身体に関わる技術は社会的、倫理的な背景を理解した上で適切に使用する必要があります。本講義では、私の取り組んでいるプロジェクトを紹介しながら、身体障害に関する技術がいかに社会に変化をもたらすかを考察していきます。

.....

遠藤 謙 (えんどう けん)

2001 年慶應義塾大学機械工学科卒業。2003 年同大学大学院にて修士課程修了。2005 年より、マサチューセッツ工科大学メディアラボバイオメカニクスグループにて博士課程の学生として、人間の身体能力の解析や下腿義足の開発に従事。2012 年博士取得。一方、マサチューセッツ工科大学 D-lab にて講師を勤め、途上国向けの義肢装具に関する講義を担当。現在、ソニーコンピュータサイエンス研究所アソシエイトリサーチャー。ロボット技術を用いた身体能力の拡張に関する研究に携わる。2012 年、MIT が出版する科学雑誌 Technology Review が選ぶ 35 才以下のイノベータ 35 人 (TR35) に選出された。

身体づくり

松本 緑

38億年前に地球上に誕生した生命体は、異なる機能の細胞による多細胞体制を獲得し、身体づくりは複雑になり、機能的にも多様性を獲得しました。約600万年前に出現したとされる直立歩行を獲得した猿人からヒトは20万年前に出現したと考えられています。地球上に生息する生物種の全てが一つの起源からできています。まず、ヒトの身体づくりを他の動物と比較し、進化の過程をたどり紹介します。

ヒトの身体の中で全ての細胞に分化しうる能力を持つ細胞（全能性幹細胞）は、受精卵のみです。1個の受精卵は、細胞分裂により子孫細胞をつくり、形態や機能の異なる多種類の細胞からなる身体となります。異なる機能の子孫細胞は、不等価な分裂によりつくられます。このような細胞の運命は、不等価な分裂により不均一に分配される物質と、不等価分裂により子孫細胞が存在する周囲の状況が異なる環境により、細胞内で発現する遺伝子の種類が変わることにより決まります。よって、身体をつくる個々の細胞の遺伝情報はどれも同じですが、異なる機能の細胞となり、分化した細胞は多分化能を消失します。扁形動物プラナリアは、「切っても切ってもプラナリア」といわれるほど再生力の高い動物で、切断により身体の一部を失っても再生することができます。この再生力は全身の細胞の3割を全能性幹細胞が占めているためといわれています。「再生できる能力がどのようなしくみで決まっているのか」について最新の情報をご紹介します。

松本 緑（まつもと みどり）

慶應義塾大学理工学部生命情報学科准教授。大阪大学大学院医学研究科修了・医学博士取得、三菱化成生命科学研究所特別研究員、東京工業大学理学部生命理学科助手、慶應義塾大学理工学部化学科専任講師を経て2002年より現職。

受精や生殖様式転換など生物が、種と個体を維持するために行う生殖戦略機構について、研究を行っている。

iPS 細胞と再生医療研究の最前線

岡野 栄之

iPS 細胞技術は、皮膚などの体細胞に数個の遺伝子を導入するだけで多能性の幹細胞を誘導する技術で、2012 年のノーベル医学・生理学賞の対象となった事は記憶に新しいかと思います。

iPS 細胞は、患者さん本人の細胞から作ることができるため、拒絶反応のない再生医療を実現できるという意味で大きな期待を集めています。私たちは iPS 細胞から神経細胞を作ることに成功しました。そして、脊髄を損傷したマウスにこの細胞を移植することにより、それまで歩けなかったマウスが走り出しました。人間にこの技術を応用するためには移植の安全性などが問題となります。神経再生研究の最先端や治療上の問題点についても解説します。

また、iPS 細胞技術は、再生医療に加えて、ヒトの病気のモデル細胞として、病態解明や創薬への応用が期待されております。私達自身のデータを紹介し、アルツハイマー病やパーキンソン病の治療の可能性についても解説したいと思います。

岡野 栄之（おかの ひでゆき）

1983 年慶應義塾大学医学部卒業。同年、慶應義塾大学医学部生理学教室に入室し、塚田裕三教授、御子柴克彦助教授に師事。その後、大阪大学蛋白質研究所助手、米国 Johns Hopkins 大学医学部・研究員、東京大学医科研・助手を経て 1994 年筑波大学基礎医学系・教授、1997 年大阪大学医学部・教授、2001 年より慶應義塾大学医学部生理学教室・教授（現職）、2007 年より慶應義塾大学大学院医学系研究科委員長。2009 年には、紫綬褒章・受章。2011 年より国際幹細胞学会（ISSCR）理事。

ルネサンス美術の巨匠たちと「身体」 —— レオナルドとミケランジェロの場合 ——

金山 弘昌

古代ギリシア以来、人の形は西洋美術において最も重要で、最も頻繁に取り上げられたモチーフ（題材）でした。それどころか、身体は、時として単なるモチーフにとどまらず、美の規範、理想美の根拠とさえなったのです。

この講義では、西洋美術史の根底をなす身体を理解やその表現の歴史の一端を紹介します。西洋美術史の流れの中でも、ひとつの頂点といえる盛期ルネサンスの時代に注目し、誰もが知る2人の巨匠、レオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロを具体例として取り上げます。

レオナルドとミケランジェロは、いずれもルネサンスの新たな理論や美意識をもって身体を把握しました。より具体的には、彼らによる身体を理解は、理想主義と経験主義の両極、すなわち古代美術に学ぶ古典主義の姿勢と近代的な解剖学の実践の組み合わせによって果たされました。

そのような共通の理解の土台の上に立つ一方、レオナルドとミケランジェロのそれぞれの作品における身体の表現は時として異なり、対極的にさえ見えます。その相違は単に両者の個性の違いに起因するだけでなく、また両者の身体理解と表現の理論的枠組みの違いにも起因していました。本講座では、いくつかの作品を例に挙げながら、2人の巨匠それぞれによる身体の表現を分析し、比較対照し、さらにはその背後にある両者それぞれの身体観と芸術との関わりを解明を試みます。

金山 弘昌（なかやま ひろまさ）

慶應義塾大学文学部准教授。慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学。2008年より現職。専門は西洋美術史・建築史。おもな研究領域はイタリア17世紀の美術・建築。おもな著作（共著）として、巻末の推薦図書の外に以下：『イタリア・ルネサンス美術論——プロト・ルネサンス美術からバロック美術へ』（東京堂出版、2000年）、『彫刻の解剖学——ドナテッロからカノーヴァへ』（ありな書房、2010年）

人とインタラクションするロボット

今井 倫太

街角での道案内や介護といった場面でロボットの活躍が将来期待されている。人と直接コミュニケーションするロボットは、製品を組み立てる工業用ロボットとは異なり、ロボットに関する知識を持たない人が相手となる。そこでは、我々が日常行っているコミュニケーションと同様にロボットも言葉や身振りをを用いてコミュニケーションできることが重要である。

本講義では、人とインタラクションすることのできるロボットの研究の現状と今後の展開について解説する。ロボットを人とインタラクションさせる上で何が難しいのか、最新のロボットはどのように人とのインタラクションを実現しているのかについて説明する。さらに、人とコミュニケーションできるロボットを実現する過程で明らかになったインタラクションにおける人間の特徴について解説する。インタラクションにおいて人が取る行動は、無意識に行われるものが多くあり、ロボットを構築する中で明らかになりつつある。また、人とインタラクションするロボットが今後社会においてどのように展開されていくのかについて展望を述べる。

今井 倫太 (いまい みちた)

平成 4 年慶應義塾大学理工学部電気工学科卒業。平成 6 年同大学大学院計算機科学専攻修士課程修了。同年、NTT ヒューマンインタフェース研究所入社。平成 9 年 ATR 知能映像通信研究所へ出向。平成 14 年慶應大学大学院理工学研究科開放環境科学専攻後期博士課程修了。博士 (工学)。現在、慶應大学理工学部情報工学科准教授および ATR 知能ロボティクス研究所客員研究員、人とロボットのインタラクションの研究に従事。

バレエにおける身体表象 —— 舞踊言語の謎を読む ——

設楽（小山） 聡子

本講座では、身体の芸術である舞踊、中でもバレエ芸術をとりあげ、バレエにおける身体表象、すなわち舞踊手の見せるパ（ステップ）の持つ謎を解きあかしていきます。

今回はとくに、超自然の存在が登場するバレエ作品に的を絞ります。例えば、空気の妖精が舞う『ラ・シルフィード』、精霊ヴィリ（若く美しい少女が死去し、森で死霊となったもの）が登場する『ジゼル』などです。実は、こうした精霊たちの世界が、初めて人間界と対立した形で取り入れられたのは、19世紀の「ロマンティック・バレエ」においてでした。これらのバレエを見て私たちは、精霊や幽霊など、目に見えないはずの世界をごく自然に、何の不思議もなく認識します。しかし、よく考えてみると、目に見えないはずのものを、バレエというれっきとした視覚芸術で表現するためには、何かメカニズムがあるはずで、一体、どんなところに秘密があるのでしょうか？ 実はその鍵は、バレエにおける個々のパにあるのです。たとえば、超自然界を暗示する代表的なポーズの一つに「アラベスク」があげられます。バレエにおいて最も美しいとされるこのポーズは、非現実の世界や彼岸の国への憧れを想起させる力を持ちます。本講座では、「アラベスク」が効果的に使われている作品を紹介すると共に、他にも様々なパが持ち得る謎を解きあかしていきます。その中で、バレエのパによる「暗示」を読み解くことを最初に主張した、19世紀のテオフィル・ゴーチエの舞踊論や、バレエを「象形文字」とするバレエ美学を完成させたステファヌ・マラルメのバレエ論も紹介します。

美しいバレエの映像、画像をふんだんに使い、視覚的にも楽しんでいただこうと思っております。

.....

設楽（小山） 聡子（したら さとこ）

慶應義塾大学非常勤講師。慶應義塾大学大学院文学研究科、仏文学専攻博士課程修了。在学中にパリ第3大学に留学。博士（文学）（慶應義塾大学）。慶應義塾大学、文化学園大学にて、フランス語、フランス文学史を教える。専門は19世紀フランスの詩人テオフィル・ゴーチエ、および、舞踊、バレエ史。ステファヌ・マラルメの舞踊論なども研究の対象。クラシック・バレエ歴は3歳から。主な論文：「テオフィル・ゴーチエの舞踊評にみるバレエ美学——パの可能性への視線」、『フランス語フランス文学研究』第85・86合併号（日本フランス語フランス文学会）、2005年／『テオフィル・ゴーチエと19世紀芸術』（上智大学出版局より2013年出版予定）、『西洋近代の都市と芸術』第2巻パリI（竹林舎より2013年出版予定）に論文掲載の予定。

科学技術はどこまで人型に迫れるか

井奥 洪二

ロボットは人間の代わりに作業をしてくれる装置あるいは人間や動物の形をした機械であり、近年特に人型ロボットの開発が注目されています。アンドロイド（人造人間）やヒューマノイドという言葉も SF やアニメの世界だけでなく、一般社会へ浸透しつつあります。この他にもバイオ（生命、生物）とアンドロイドを組み合わせたバイオノイドやバイオロイド、機械で身体や能力を強化されたサイボーグもメディアなどでしばしば見かけますが、最近ではそれぞれの言葉の境界が曖昧になっているように見受けられます。

一方、人間の身体そのものを扱う医療では、iPS 細胞の登場によって明るい未来が見えてきました。iPS 細胞は病気や事故で困っている人を救うことができる反面、社会問題を生ずる危険性を秘めています。例えば、動物によるヒト臓器の生産、死者からの子供やクローンの作成など混乱の種が潜んでいます。さらに、自然界に存在しない生命体で作られた「人型」が登場する可能性もあります。合わせて、人工知能の進歩も目覚しく、将棋ではプロ棋士に勝つ高度なプログラムが登場しました。無形であるにも関わらず、人間と区別のつかない人工知能は、バーチャルな人型でしょうか。

科学技術はどこまで人型に迫ることができるのか、その先に何があるのか、私たちの暮らしのかたちはどうあるべきか、考えるヒントを紹介します。

.....

井奥 洪二（いおく こうじ）

慶應義塾大学経済学部教授。東京工業大学大学院博士後期課程単位取得退学。工学博士（東京工業大学）。高知大学理学部助手、山口大学工学部助教授、同大学院医学系研究科助教授、東北大学大学院環境科学研究科教授を経て 2012 年 4 月より現職。NPO 法人環境エネルギー技術研究所理事。生体材料の研究に従事し、アメリカ材料科学研究協会奨励賞、アジアバイオセラミックス賞、日本セラミックス協会学術賞など受賞。専門は、医工学、環境科学、材料科学。3.11 を仙台で被災して以来、科学技術社会論を新たな専門としている。

トップアスリートの身体

—— クルム伊達公子選手を始めプロテニスアスリートが
どのように身体を鍛えてツアー転戦をしているのか ——

坂井 利彰

トップアスリートはベストパフォーマンスを発揮することに日々試行錯誤を繰り返している。ドーピング問題は世界スポーツ界において深刻な問題であり、様々な競技において摘発が後を絶たない。プロテニス界においても血液ドーピングに対する問題意識が高まっている。プロテニスの年間スケジュールはオフ期間が短く、毎週世界を転戦して結果を残すことが求められている。プロテニス選手はホームコートで練習やトレーニングをする時間が限定され、ツアー転戦先がホームコート、ホームジムになる。そのような環境下、怪我予防に加えてパフォーマンスを最大限に発揮できるしなやかな身体作りに日々取り組んでいる。世界男子ツアーにおいては、世界トップ100選手の平均年齢が10年前に比べて2歳も延びており、選手間の競争は激化している。慶應義塾主催で開催されている慶應チャレンジャー国際テニストーナメントにおいては、数多くのプロテニスアスリートが身体を鍛えながらツアー転戦している。また、日本滞在中に慶應義塾大学で練習を行うクルム伊達公子選手は身体を鍛えることに対する意識が非常に高い。トップアスリートがどのように身体を鍛えながらツアー転戦しているのか、様々な事例を挙げながら紹介したい。

坂井 利彰（さかい としあき）

東京都出身。慶應義塾大学体育研究所専任講師。専門はスポーツコーチング（テニス）、トップスポーツマネジメント。大学時代に全日本学生単優勝、日本アマチュアランク単1位、プロ転向後は世界ツアーを転戦。引退後は慶應義塾大学体育会庭球部監督に就任。日本人として初めてATP（世界男子ツアー）公認プロフェッショナルコースを修了。日本テニス協会公認S級エリートコーチ、日本体育協会上級コーチ。主な著書に『テニス世界最先端の練習法』（東邦出版）、『テニスダブルス最強の戦術』（メイツ出版）。

ブラインドサッカーから考える身体知

松崎 英吾

ブラインドサッカーは視覚障がい者がプレーするフットサル（5人制サッカー）で、パラリンピック種目にもなっています。日ごろは、視覚障がい者が地域のリーグ戦や日本選手権、日本代表になり世界で活躍するような「競技」に焦点が当てられています。

同時に、ブラインドサッカーは目を活用せずにチームスポーツを突き詰めているスポーツとも言えます。視覚に障がいがない人でも、アイマスクをして、音や仲間の声を頼りにコミュニケーションをとることは、目が見えているなかでは気づきにくいこと、感じにくいことに触れる気づきの場でもあります。実際に、日本ブラインドサッカー協会では年間 220 件以上の学校で出張授業や、企業研修を展開しています。目の見えないスポーツ体験から、学びの機会を得ようとする試みです。

ブラインドサッカーの選手は、「第 6 感があるのでは」としばしば言われます。しかし、彼ら彼女らに特別な能力があるわけではなく、私たちが日ごろ活用していない力を意識深く活用しているのです。

本講義では、そのような見える人に向けた取り組みから得られた経験から、視覚に障がいがない人を対象に、見えない体験から「見えてくる」ものを考えていきます。講義形式ではありますが、ミニワークの見えない体験も行う予定です。

松崎 英吾（まつざき えいご）

日本ブラインドサッカー協会事務局長。慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究所研究員。学生時代に出会ったブラインドサッカーに衝撃を受け、深く関わるようになる。大学卒業後一般企業に就職するものの「ブラインドサッカーを通じて社会を変えたい」との想いで、日本視覚障害者サッカー協会（現・日本ブラインドサッカー協会）の事務局長に就任。「サッカーで混ざる」をビジョンに掲げる。サステナビリティをもった障害者スポーツ組織の経営を目指し、事業型非営利スポーツ組織を目指す。スポーツに関わる障害者が社会で力を発揮できていない現状に疑問を抱き、障がい者雇用についても啓発を続ける。

人形愛の精神分析

藤田 博史

人形（にんぎょう・ひとがた）の歴史は、人類が文字を発明するよりも以前、つまり先史時代にまで遡るといわれています。人形の歴史は人類の歴史と共にあったといっても過言ではありません。したがって人形という造形物は、極めて多様かつ多義的なものであり、一括りで定義するのは大変難しいことです。

人形は祭祀に使われたり、宗教的な意味を持たせたり、人の死生観に密接に結びついたり、自らの分身や身代わりとして利用されたり、身近なものでは子供の玩具として与えられたりしてきました。

ですから、推理小説まがいの大げさないい方をすれば「人形は人類の秘密を知っている」のかもしれませんが。人形は先史以来、人と共にあり、人の心の様式と密接に結びつきながら、人種の違いや歴史の違いを超えて、こういってよければ「時空を超えて」人類の秘密を内に秘めながら存在し続けている「身近で不可思議な造形物」ということができるかもしれません。

この講義では、フロイトによって創始され、ラカンによって数学的に厳密化された現代の精神分析理論が、この「不可思議な造形物」をどのように考え得るのか、それは人の心、特に意識されていない心の部分とどのような関わりを持つのか、ということ、ラカンをご存じない方でも理解していただけるように、できるだけシンプルな形で考察してみたいと考えています。

藤田 博史（ふじた ひろし）

精神科医・形成外科医・麻酔科医・精神分析家。信州大学医学部卒。元ニース大学附属パスツール病院医師。医療法人ユーロクリニック理事長。フランスの精神分析に精通し、ジャック・ラカンの精神分析理論に関する研究では日本の第一人者。日本のへき地・離島医療にも造詣が深く、東京都伊豆・小笠原諸島の診療所において約10年間に渡り、へき地・離島医療に従事。2001年から一般公開セミナー「人形の身体論—その精神分析的考察」、2003年から日仏会館で「量子論的精神分析」の一般公開セミナーを主催。2003年に新宿ゴールデン街に『精神分析的実験バー・クレマスター』を設立し、毎週木曜夜には「フジタゼミ」がおこなわれている。

文楽の過去 現在 未来

豊竹英大夫、伴野久美子

日本の人形芝居の代表である人形浄瑠璃（文楽）が西洋の糸繰りなどと異なるのは、人形遣いが舞台上に姿を見せて直接人形を操作することです。それにより人形による緻密な演技、ダイナミックな演出、長時間の鑑賞が可能になりました。そのためしばしば文楽は人形の特異性だけがクローズアップされますが、文楽の最も魅力的なものは、大夫、三味線、人形という「三位一体」の表現によるドラマとしての面白さではないかと存じます。そこで本講座では、文楽の手ほどきだけではなく、文楽の芸術的可能性をご覧いただくとともに、義太夫ワークショップによる体感も行なっていただきます。

1、過去～現在＝文楽は、大夫と三味線によって描き出される情景や登場人物の言葉・心理を聞きながら、人形遣いによって表現される人形の姿や表情、動きを目で楽しみます。演目は、時代物（公家や武家など支配階級の世界の出来事）と世話物（一般庶民の世界の出来事）に大別されます。文楽の歴史、背景、現状、創意工夫。

2、現在～未来＝パロディとの共演「落語と文楽のあやしい関係」、関連演目による声の表現「琵琶楽 能楽 文楽」、舞踏とのコラボレーション作品「舞踏の源流・文楽」、ゴスペル イン 文楽「イエス・キリストの生涯」等公演記録映像。

.....

豊竹 英大夫（とよたけ はなふさだゆう）

文楽大夫。三世。本名・林雄治。1967年三世竹本春子大夫に入門、祖父は十世豊竹若大夫（人間国宝）。68年初舞台。69年四世竹本越路大夫（人間国宝）の門下となる。71年国立劇場奨励賞。78年文楽協会賞。94年国立劇場文楽賞文楽奨励賞。2003年国立劇場文楽賞文楽優秀賞。04年ユネスコ本部「世界無形遺産承認式」公演ほか。

伴野 久美子（ばんの くみこ）

現代美術家。甲南大学経営学部卒業。故・元永定正氏に師事。現代日本美術展、朝日現代クラブ展ほか入選多数。毎年個展を開催。1993年から「源流を着る 舞う 奏でる」「古典の新芽」「なかなかあえない芸能」「見て聴いて参加して」シリーズ等舞台プロデュース。大阪芸術大学元非常勤講師。（株）倉敷製帽客員デザイナー。

推薦図書一覧

公開講座各講師にご自身の講義に関連する書籍を推薦していただきました。授業の予習もしくは復習にお役立てください。

9月29日 新島 進

『イノセンス創作ノート』押井守（徳間書店、2004年）

『イマージュの解剖学』ハンス・ベルメール（河出書房新社、1975年）

10月12日 鈴木晃仁

『からだの知恵：この不思議なはたらき』W.B.キャノン、館鄰・館澄江訳（講談社、1981年）

『免疫複合：流動化する身体と社会』エミリー・マーチン、菅靖彦訳（青土社、1996年）

10月12日 山田 深

『宇宙へ「出張」してきます——古川聡のISS勤務167日』古川聡、林公代、毎日新聞科学環境部（毎日新聞社、2012年）

10月19日 石黒 浩

『どうすれば「人」を創れるか？ アンドロイドになった私』石黒浩（新潮社、2011年）

『ロボットとは何か——人の心を映す鏡』石黒浩（講談社現代新書、2009年）

10月19日 小倉孝誠

『身体の文化史』小倉孝誠（中央公論新社、2006年）

『〈女らしさ〉の文化史 性・モード・風俗』小倉孝誠（中公文庫、2006年）

11月2日 岡野栄之

『ほんとうにすごい！ iPS細胞』岡野栄之（講談社、2009年）

『iPS細胞——夢の再生医療を実現する』ニュートンムック Newton 別冊（ニュートンプレス、2012年）

11月9日 金山弘昌

『レオナルド・ダ・ヴィンチの世界』池上英洋編、金山弘昌他（東京堂出版、2007年）

『フレスコ画の身体学——システィーナ礼拝堂の表象空間』上村清雄責任編、金山弘昌他（ありな書房、2012年）

11月9日 今井倫太

『コミュニケーションロボット——人と関わるロボットを開発するための技術』（知の科学）石黒浩、神田崇行、宮下敬宏（オーム社、2005年）

『他者の心は存在するか——「他者」から「私」への進化論（自己の探究）』金沢創（金子書房、1999年）

11月16日 設楽（小山）聡子

『舞踊評論（CLASSICS ON DANCE）』渡辺守章編、井村実名子、渡辺守章、松浦寿輝訳（新書館、1994年）

『バレエ誕生』鈴木晶（新書館、2002年）

11月16日 井奥洪二

『新しいくらしかたのか・た・ち』高橋由貴彦、安田喜憲、田路和幸、彼谷邦光、井奥洪二、石田秀輝（芸立出版、2007年）

11月30日 坂井利彰

『テニス世界最先端の練習法』坂井利彰（東邦出版、2010年）

11月30日 松崎英吾

『闇の中の翼たち』岡田仁志（幻冬舎、2009年）

『サッカーボールの音が聞こえる』平山譲（新潮社、2010年）

12月7日 藤田博史

『人形愛の精神分析』藤田博史（青土社、2006年）

『性倒錯の構造（増補新版）』藤田博史（青土社、2006年）

『人間という症候』藤田博史（青土社、1993年）

12月7日 豊竹英大夫、伴野久美子

『熱烈文楽』中本千晶（三一書房、2008年）

『文楽のツボ』葛西聖司（NHK出版・生活人新書、2006年）

日吉図書館（メディアセンター）の利用について

日吉キャンパス公開講座受講生の皆様は講座期間中、日吉図書館（慶應義塾日吉メディアセンター）への入館が可能となります（閲覧のみ）。

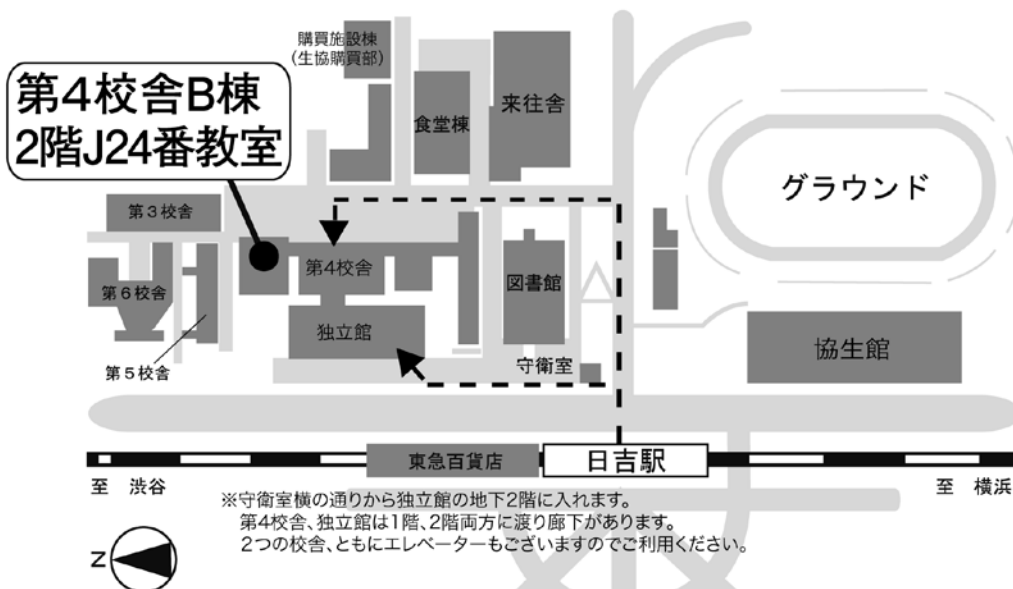
期間中は、公開講座講師の推薦図書の展示も行っています。ぜひこの機会にご利用ください。

期間 2013年10月5日～12月7日

*入館の際には、受付に日吉キャンパス公開講座受講票を提示してください。

*資料の貸し出しはできません。

会場案内



●○●天候悪化（台風・大雪等）、災害による休講等の取扱いについて●○●

地震、暴風雨など或いは交通機関の運休の影響で、交通機関不通などの災害時、日吉キャンパス公開講座の授業が休講となるかどうかは、慶應義塾大学の学部授業の対応に準じ、当日の午前10時30分迄に決定いたします。なお、お電話は多数のお問い合わせが予想されます。インターネットでの確認、もしくは近隣の方は大学警備室にてお尋ねいただければ幸いです。

お電話（公開講座事務局） 045-563-3978

窓口 慶應義塾大学日吉キャンパス警備室

インターネット（10時30分以降に更新いたします）

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/kouza/index.html>

2013年10月5日発行

主催・編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター・日吉キャンパス事務センター
代表者 不破有理

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

運営 日吉キャンパス公開講座事務局

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/kouza/index.html>

©2013 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。